

南米アンデス先住民語の文法書

蝦名大助

Grammatical Descriptions of Andean Languages

EBINA, Daisuke

Keywords: the Andes, Quechuan Language Family, Aymaran Language Family, Araucanian languages

キーワード: アンデス, ケチュア語族, アイマラ語族, アラウコ語族

1. 南米の主な語族とその地理的分布
2. 南米先住民語研究史
3. 南米先住民語の概説書
4. アンデス先住民語とその文法書
5. まとめ

1. 南米の主な語族とその地理的分布

本稿では、南米アンデス地域で話される先住民語の主な文法書や、近年までの研究動向、それぞれの言語のおおまかな特徴について述べる。本論に入る前に、ここでは南米全体の主要な語族と、その地理的分布、地域区分について述べる。

1.1. 主な語族

主要な語族として、以下の10が認められる。大陸北部に位置するものから順に挙げる。

チブチャ(Chibcha), アラワク(Arawak), カリブ(Carib), トゥピ・グアラニー(Tupí-Guaraní), トッカノ(Tucano), パノ(Pano), (マクロ)ジェー(Macro-Jê), ケチュア(Quechuan), アイマラ(Aymaran), もしくはハケJaqi), アラウコ(Arauco)

チブチャ語族の主要な分布域はコロンビアを中心とし、中米の一部にまで及んでいる。いわゆる中間領域¹に位置する。アラワク語族, カリブ語族, トゥピ・グアラニー語族, トッカノ語族,

蝦名大助. 2022. 「南米アンデス先住民語の文法書」. 渡辺己・澤田英夫(編)『参照文法書研究』.(アジア・アフリカ言語文化研究 別冊 02.) pp. 247-261. DOI: <https://doi.org/10.15026/116969>



This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>

¹ 中間領域 (intermediate area) とは主に考古学で用いられる用語で、「メソアメリカとアンデスのあいだ」、という意味で

パノ語族は主にアマゾン流域に位置している。これらの語族は相互に分布域が重なることもあり、言語接触が頻繁に見られる。最も話者人口の多いのはトゥピ・グアラニー語族で、分布はかなり広い。主要な先住民語の一つであるグアラニー語が属する。(マクロ)ジェー語族はブラジル東部に分布する。

ケチュア、アイマラ、アラウコの各語族はアンデス地域に分布しており、本稿で詳しく述べる。いずれも南米先住民語の中では話者人口が多い。

1.2. 地域区分

上記の語族に含まれない小さな言語群や孤立言語も多く見られ、また地域内での言語接触も盛んであるので(特にアマゾン領域)、以下のように地域で言語を分ける方法も有用である。

中間領域, アマゾン, ブラジル東部, アンデス², チャコ, コノスール

アマゾン流域については、コロンビア、ベネズエラ、ブラジルの低地を中心とした北部と、ボリビア低地を中心とした南部とで言語系統に一定の違いが見られるので、北部と南部とに分けるやり方も有用であるかもしれない。チャコとコノスールに分布する言語はいずれも話者数が少なく、消滅しかけの言語も多い。

2. 南米先住民語研究史

ここでは南米先住民語の研究史について簡単に述べる。南米先住民語の研究は、ヨーロッパ人による征服以降、スペイン人やポルトガル人の宣教師によって始められた。たとえば、ケチュア語最古の文法書は1560年に著されている(Santo Tomás 1560)。宣教師による文法書や辞書の出版は植民地期を通して見られる。19世紀の独立以降になると、欧米人探検家による記述なども見られるようになった。

現代的な水準の研究が現れてくるのは20世紀半ば以降である。主な担い手は地域によって多少異なるが、米国人研究者が多く、また現地研究者であっても特に初期には米国で言語学を学んだ研究者が多い。その中で数が多いのが Summer Institute of Linguistics の研究者である。アマゾン流域の言語の文法書は、多くが Summer Institute of Linguistics の研究者によるものである。アンデス諸国ではオランダやフランスなど欧州系の研究者が比較的多く見られる。また近年はアマゾン流域を中心としてオーストラリアの研究者も見られる。ブラジルのように現地研究者が比較的多く見られる国もある。先住民語話者自身が研究者でもある例も見られるが、まだ比較的少ない。南米先住民語の研究史は Adelaar (2004) に詳しい。

南米先住民語研究では、特有の用語や記述上の特別な特徴、といったものはそれほど多くないように思われる。特に近年の文法書は比較的理解しやすいものが多いように思われる。時代が遡ると、特定の枠組みに従って書かれているものもいくつか見られる。また、例文にグロスがなく、その言語を知っている読者でないと理解しにくいものも見られる。

ある。

² 考古学で「アンデス」といった場合には山岳部だけでなく海岸部も含まれる。アンデス海岸部ではスペイン人到来以前に先住民語が話されていたが、現在はすべて死語となっている。

3. 南米先住民語の概説書

近年、南米先住民語の概説書の出版が相次いでいる。個々の言語の記述文法が相次いで発表されてきていることに伴い、概説書の記述もより正確で詳細なものになっている。本稿の主な目的は、アンデス先住民語の文法書について述べることであるが、概説書の記述も有用であることが多いため、以下に主な概説書を挙げたいと思う。

Dixon and Aikhenvald (1999) は主にアマゾン流域の言語の概説である。アラワク、カリブ、ジェー、トゥピ・グアラニー、トゥカノ、パノなどの語族を扱う。Adelaar (2004) は「アンデスの言語」とタイトルが与えられているが、実際にはアンデス以外にも中間領域の南米側、アマゾンやチャコの一部、コノスールを扱っている。南米大陸の中で、前述の Dixon and Aikhenvald (1999) を補完する地域が扱われており、そのような意図があったものと推測される。前者に比べると文法の記述がやや少なく、歴史的な情報が比較的多い。この二冊で、南米先住民語全体の概要をつかむことができる。上で述べたように Adelaar (2004) では南米先住民語の研究史も扱われており、この点でも有益である。

Campbell and Grondona (2012) は最新の系統分類を挙げる他、類型学的特徴に一章が割かれている。O'Connor and Muysken (2014) は南米先住民語の歴史に関する著作である。

日本語で書かれたものとしては細川による言語学大事典の各項目がある（細川 1989などを参照）。1980年代という時代を考えると、当時これだけ詳しい情報を手に入れることができたことは驚きであり、現在でも有益な情報が多い。ただし系統分類についてはやや古くなっている部分もある。

Klein and Stark (1985) はやや古いですが、現在でも引用される文献である。ほぼ同時代の Payne (1990) はやや雑多ではあるが、Dixon and Aikhenvald (1999) 以前にアマゾン諸言語をまとめて扱ったものである。Constenla Umaña (1991) は中間領域の言語の概説である。情報量はそれほど多くないが、この地域の概説書が少ないだけに有用である。

Gildea (1998) はカリブ語族の概説書である。語族単位の概説書は比較的珍しい。同様にケチュア語族全体を扱ったものとして Cerrón-Palomino (1987) がある。

国ごとに先住民語を扱ったものもある。González de Pérez and Rodríguez de Montes (2000) はコロンビアの先住民語を扱ったものである。文法記述はやや少ないが、地図が充実していて各言語の分布が分かりやすい。Crevels and Muysken (2009, 2012) はボリビアの先住民語についての概説書であり、第1巻でアンデス、第2巻でアマゾンを扱っている。文法概説が比較的しっかりしている。Rodrigues (1986) はブラジルの先住民語を扱っている。

4. アンデス先住民語とその文法書

4.1. 「アンデス」の範囲

アンデスということばは、自然地理学、政治学、考古学など、分野によって幾分異なる意味で用いられる。自然地理学でアンデスといえば、北はコロンビアから南はチリに至るまでの南北7,500kmにおよぶ山脈を指す。政治的にはコロンビア、エクアドル、ペルー、ボリビアの4カ国がアンデス諸国と呼ばれる。考古学でアンデスといえば、ペルーを中心とした一つの文明圏を指

す。本稿ではこの最後の定義におおむね沿った意味で、アンデスということばを用いる。すなわち、インカ帝国の最大版図におおむね相当する地域で話されている（あるいは話されていた）先住民語を、アンデス先住民語と呼ぶことにしたい。なお、本来であれば、アラウコ語族はアンデス先住民語には含めるべきではないかもしれない。しかし、ケチュア語族やアイマラ語族との類型的な共通性が（部分的に）見られることから、本稿ではアラウコ語族の言語についても取り上げることにした。

Adelaar (2004) は、アンデスの代わりに Inca Sphere という独自の用語を用いている。やはり、かつてのインカ帝国の版図で話されている（ていた）言語群を指すための用語だと思われる。なお Adelaar (2004) でもアラウコ語族が取り上げられているが、ケチュア語族やアイマラ語族とは異なる章で扱われている。

4.2. アンデス先住民語研究の歴史

アンデス先住民語研究は、植民地時代の宣教師によるものに端を発し、長い伝統がある。1560年に Santo Tomás による文法書が出され、その後 Gonzales Holguín (1607) などが続いた。現代的な意味での研究は、20世紀半ばに始まったとっていいであろう。ペルー言語学の祖とされる Alfredo Torero が1960年代に歴史研究を発展させた (Torero 2002などを参照)。同時代に Gary Parker もケチュア諸語の系統関係の研究を行なっている (Parker 1969-1971などを参照)。これらの研究によって、かつてはケチュア「語」と考えられていたものが、実際には語族といえるほど互いに異なる言語群を成していることが明らかになった。その後、さまざまなケチュア語の変種の記述が進んだ。ペルーでは Torero の研究を継いだ Cerrón-Palomino が歴史研究を発展させている。

60年代から80年代にかけてさまざまなケチュア語の変種の記述研究が進み、その後も散発的に記述文法書が出されているが、アンデスでは記述研究と同じかそれ以上に歴史言語学的な研究が盛んである。これは中央アンデスで様々な文明が栄え、そのため考古学が盛んであることによると思われる。ただし国ごとに幾分関心は異なる。ペルーでは歴史研究に対する関心が高いが、エクアドルでは言語教育や言語保持に対する関心が高い。ボリビアでは社会言語学的な研究も見られる。また、ペルーとボリビアでは、同じ研究者が両国にまたがって研究を行なっているケースもよく見られ、研究者間の交流も盛んである。

アイマラ語族の研究は長い間 Hardman を中心に行なわれてきたが、最近では新しい研究も見られる (Coler 2014 など)。チリを中心に分布するマプチェ語は地理的にやや離れているために研究者集団が異なる。また、近年、死語や少数言語の記述も進んでいる。

4.3. アンデス先住民語の類型的特徴と文法記述の特徴

アンデス先住民語は類型的におおむね以下の共通特徴を持つ。語形成は膠着的で、ほぼ接尾辞のみによる。格のパターンは対格型であり、文法関係は主要部標示型（あるいは二重標示型）である。形容詞名詞型であり、非定形動詞、特に名詞化による従属節形成が盛んである。1人称に除外形と包括形の区別がある。また証拠性 (evidentiality) を表す文法範疇が発達しているが、この最後の特徴はアマゾン流域の言語にも広く見られる。

記述上の特徴としては、統語論に対し形態論の記述が多いことが挙げられる。これは一つには形態的に複雑な言語が多いので、形態論の記述が中心であることの裏返しだと考えられる。同時に、歴史言語学的な関心に応えるような研究が求められたということもあったかもしれない。す

なわち、個々の形態素の形式や、意味の説明が中心である、ということである。また、古い研究ではグロスがなかったりして、形態構造や統語構造が理解しにくいこともある。しかし近年は高水準の記述が現れてきている。

音韻表記は、時代や国によって違いが見られる。ケチュア語族の一部の言語、およびアイマラ語族の言語には、閉鎖音に、無声無気音、無声有気音、放出音の3系列がある。現在は無声有気音に対して^hまたはh、放出音に'をあてるのが一般的である。例えば軟口蓋閉鎖音はk, kh, k'のように表記される。しかし、時代がさかのぼると有気音に対しk'のようにアポストロフを重ねて表しているものがあったり、kk, kkkのように子音字を重ねて有気音や放出音を表すものがあったりするため、注意が必要である。また、/h/ [h] はペルーでは近年はhで表されることが多いが、ボリビアでは依然としてjで表されることが多い。専門書以外まで視野に入れると、j以外にも/w/ [w] に対するguやhuなど、スペイン語式の表記もよく見られるので注意が必要である。こういった表記上の問題は、アンデスにとどまらずスペイン語圏全般に見られる問題だと考えられる。教科書などの学習書の場合、どのような表記法を用いるかは簡単な問題ではない。想定される読者がスペイン語式の表記法に慣れているからである。

4.4. ケチュア語族

4.4.1. 分布と系統分類

ケチュア語族(Quechuan language family)は、北はコロンビア南部から、南はアルゼンチン北部にかけて、おおむねインカ帝国の最大版図に広がる南米先住民語中最大の語族である。ケチュア諸語(Quechuan languages)とも呼ばれる。語族内にいくつの言語を認めるか、研究者間でコンセンサスがあるとはいえない。細川(1988b)は約40の変種を認めている。

ケチュア語族の現在の分布がインカ期の分布をそのまま反映しているわけではない。ボリビアやエクアドルの多くの地域では、インカ期に第二言語として話されていた公用語であったケチュア語が母語化したと考えられる。またボリビアの一部の地域ではスペイン植民地期以降にケチュア語が流入したようだ。アルゼンチンでも多くの地域が植民地期以降にケチュア語化したと考えられるが(細川1988a)、一部はボリビアからの移民による。またエクアドルのアマゾン地域では、高地からのケチュア語話者の移住に伴ってケチュア語化が起こったとされているが、これはさほど古い時代のことではない。

系統分類としては、ペルー中央部で話されるケチュアIグループと、周縁部で話されるケチュアIIグループとに分かれるというのが通説となっている。Heggarty(2005)は、ケチュア諸語の方言連続体的な側面を強調したが、多くの研究者は依然として伝統的な系統分類を支持している(Adelaar 2013など)。格接尾辞の形式や、その他いくつかの文法的形態素の形式に大きな違いが見られるが、文法構造はよく似ている。また、人称接尾辞は語族を通じてよく似ている。

4.4.2. 類型の特徴

ケチュア語族は典型的にアイマラ語族ときわめて類似している。ケチュア語族が分岐する前の祖語の段階でアイマラ語族(の祖語?)との言語接触があり、文法構造に大きな影響を被ったと考えられている。また分岐後も接触があったようである。

アイマラ語族と共通・類似する特徴としては、統合度の高さ、1人称における除外形と包括形の区別(clusivity)、動詞における主語・目的語の標示、格体系、動詞における証拠性の標示、などが挙げられる。これらのうち、少なくとも統合度、clusivity、主語・目的語の標示については明

らかにアイマラ語族からケチュア語族への影響と考えられる。従属節形成において非定形動詞、特に名詞化が大きな役割を果たす点もアイマラ語と共通である。語順はSOVとされることが多いが、主要部・従属部両者で文法関係が標示されるため、主節では比較的語順が自由である。

ケチュア語族内の諸言語は、文法的にかなり均質である。ただしいくつかの言語では人称標示の一部が失われているなど、やや文法の単純化が見られる。特に北部の変種で単純化が目立つ。言語的な差は語彙面で大きく、ケチュアIグループの言語とIIグループの言語とでは相互理解が困難であるといわれる。音韻面ではペルーのクスコ県以南のケチュア語で、閉鎖音に無声無気音、無声有気音、放出音の3系列が認められるが、これはケチュア祖語からの分岐後に一部のケチュア語に起こったアイマラ語による影響であると考えられる。一方、エクアドルなど北部のケチュア語では鼻音の直後でいくつかの閉鎖音の有声化が見られる。

4.4.3. 文法書

ケチュア語族の研究は、話者数が最大であり数多くの変種が分布しているペルーでもっとも盛んである。全体の概説書としては前述したようにCerrón-Palomino (1987)がある。またAdelaar (2004)はアンデス全体を扱っているが、ケチュア語族についても詳しい。既に述べたように、ペルーでは、Alfredo ToreroやGary Parkerが1960年代に歴史研究を進展させ、同時に現代的な水準の文法書が現れはじめた。その後1976年に教育省(Ministerio de Educación)とInstituto de Estudios Peruanos (IEP)が共同でそれぞれ6冊の文法書と辞書を発行した。これはペルーを6つの地域に分けて地域ごとのケチュア語を記述したものだが、それぞれが必ずしも単一の変種ではない、という問題がある。つまり、実際にはペルー国内では6つ以上のケチュア語の変種が行なわれているにもかかわらず、便宜的に6つに分けたため、異なる変種の記述が1冊で行なわれてしまっている場合がある、ということである。また例文にグロスがなく、全般的に統語論の記述が少ないなどの問題があるが、その後各変種の記述が進んでいない地域もあるため、現在でも有用なシリーズである。文法書(Gramática quechua)は以下の6冊から成る：Cerrón-Palomino (1976), Coombs et al. (1976), Cusihuamán (1976), Parker (1976), Quesada (1976), Soto Ruiz (1976)。

以下ではまずケチュアIグループに属する言語の文法書を紹介し、次にIIグループの文法書を挙げることにする。

ケチュアIグループの言語の文法書には、Cerrón-Palomino (1976), Parker (1976), Adelaar (1977), Weber (1989)などがある。Weber (1989)は詳細な文法記述であり、ケチュア諸語の文法的な特徴を把握するのに適している。スペイン語版としてWeber (1996)もある。

次にケチュアIIグループのうち、ペルー領内の言語の文法書を挙げる。Parker (1969), Coombs et al. (1976), Cusihuamán (1976), Quesada (1976), Soto Ruiz (1976), Taylor (1982, 1996), Adelaar (1986)などがある。また近年出版されたものとしてWroughton (1996)やShimelman (2017)などがある。Weber (1989)同様、これら2冊も詳細な記述であり、ケチュア諸語について理解するのに適した文法書である。

ペルー以外に分布するケチュア語はすべてIIグループに属する。ボリビアはペルーに次いでケチュア諸語の話者人口が多い国であるが、近年目立った文法書は出されていない。Lastra (1968)はコチャバンバ・ケチュア語の記述である。形態素分析はなされているが例文にグロスがないという問題がある。

エクアドルも比較的話者人口が多いが、近年は言語保持・言語政策や言語接触に関する研究が多く、目立った文法書は少ない。Cole (1985)によるインブラ・ケチュア語の記述がある。

コロンビアで話されるケチュア語の変種は1つだけであり、インガ語 (Inga) と呼ばれる。Levinsohn (1976) の記述があるが、tagmemics によるもので、形態素分析が成されていない、という問題がある。

アルゼンチンでは Bravo (1956) がある。

4.4.4. 記述上の特徴

ケチュア語族の文法書における一番の問題は、例文などで形態素分析が成されていないものがあることだろう。1970年代ごろまでの文法書によく見られる。(1) は Soto Ruiz (1976) が挙げる例文である。

- (1) *Pukllayta atin* ‘Puede jugar.’ (Soto Ruiz 1976: 48)

グロスと形態素境界を示すと以下ようになる。

- (2) *Puklla-y-ta* *ati-n*
 遊ぶ-INF.NMLZ-ACC できる-3
 「彼(女)は遊べる。」

この箇所は同書で統語構造を示す章であり、形態素分析は必要ないと考えられたのかもしれないが、複文の例であり、形態素分析が成されていたほうがわかりやすい。

グロスが示されないこともよくある。(3) も Soto Ruiz (1976) からの例である。

- (3) *Llaqta-kuna-ta* ‘a los pueblos’ (Soto Ruiz 1976: 48)

この例文には ‘a los pueblos’ 「町(複数)に」という訳があてられており、ここでは形態素境界が示されている。また前後の文脈から *llaqta* が「町」、*-kuna* が複数、*-ta* が何らかの格を表していることが分かるが、グロスがないため *-ta* が対格を表すことは同書の他の箇所を見なければわからない。

本文での説明の中に例文が示されることもあり、その場合にもグロスや形態素境界が示されないことがよくある³。

2つめの特徴として、個々の接尾辞の説明に多くの紙幅が割かれていることが挙げられる。たとえば、Parker (1976) の章立ては次のようになっている。

1. 導入
2. 音韻論
3. 単文
4. 名詞句
5. 動詞句
6. エンクリティック
7. 複文

³ これらの問題には、印刷技術や、1行あたりの文字数、ページ数などの制約が原因としてあったのかもしれない。

他の Gramática quechua のシリーズも、似たような章立てになっている。Parker (1976) では、4 章と 5 章の多くが接尾辞の説明にあてられている⁴。前述したように、形態論が複雑であることがその理由として考えられる。しかし、接尾辞の承接関係が図や表などで示されておらず、形態構造がどうなっているのか、分かりにくいこともある。もっとも、特に動詞について、接尾辞の数が多いため、承接関係や個々の接尾辞の位置を完全に明らかにするのは難しい。後述するように、マプチェ語研究でも同様の困難があるようだ。

付属語 (clitic) を認めるかどうかについて、文法書によって扱いが異なっている。Parker (1976) など Gramática quechua のシリーズは、一貫して clitic を認めている。一方、Adelaar (1977)⁵ や Weber (1989) は認めていない。また、認めていても接尾辞同様の表し方をされていて、区別がまぎらわしいこともある。以下に述べるように、筆者は clitic を認めたほうがよいと考えている。

ケチュア諸語の clitic には、主題を表す =*qa*、フォーカスや確言を表す =*mi*/*=η*、疑問／否定のフォーカスを表す =*chu* など情報構造に関わるものがある。

- (4) *ama waqa-y=chu.*
NEG.IMP 泣く -IMP=NEG.FOC
「泣くな。」 (Ebina 2011: 29)

- (5) *wasi-y-manj hamu-ηki=chu.*
家-1-DAT 来る-2=Q.FOC
「君は私の家に来ますか？」 (Ebina 2011: 29)

(4)(5) はクスコ・ケチュア語の例である。(4) は否定文であり、否定辞 *ama* とともに =*chu* が現れている。(5) は疑問文であり、疑問のフォーカスである *hamu-ηki* に =*chu* が付いている。

ケチュア語族の研究では接尾辞において派生と屈折の区別が一般に認められている。これらの形態素は屈折接尾辞の外側に現れる。そうであれば、これを clitic とするか、屈折接尾辞とするかしかない。これらの形態素は i) 義務的要素ではない ii) ほとんどの接尾辞はホストが決まっています名詞か動詞どちらかにしか付かないが、これらの形態素は名詞にも動詞にも小辞にも付く、といった性質があることから、屈折接尾辞とは認めにくい。であれば clitic と見るべきだと思われる。また、これらの多くが談話構造に関わる、すなわち文よりも大きな単位に関わる要素である。

対応する独立形が存在する clitic もある。たとえば、*ña* 「既に」は自立語としても現れるし、付属語としても現れる。表す意味はかわらない。一文中に共起することも可能である。再びクスコ・ケチュア語の例を挙げる。

- (6) *ña allij-ta=ña michi uyari-sha-η chay-ta.*
もう 良い-ACC=ENCL 猫 聞く-PROG-3 それ-ACC
「もう猫はそのことをよく聞いている。」

これも接尾辞とは認めにくいであろう。

⁴ 章のタイトルは La frase sustantiva (名詞句、あるいは実詞句)、La frase verbal (動詞句) となっているが、実際には内容の多くは句についてではなく名詞形態論と動詞形態論についてである。

⁵ 厳密に言えば、Adelaar (1977) はわずかな clitic の例を認めているが、本稿で挙げるような形態素は接尾辞として扱っている。

アイマラ語族の文法書においても同様の問題があるが、これについては4.5で検討する。

ケチュア語族の記述においては特殊な用語が用いられることはあまり多くないが、一般的ではないものとして transition(s) (スペイン語：transición/transiciones) という用語がある。これは動詞における人称標示を指すもので、Adelaar (2004: 219) によれば、スペイン植民地時代の文法書に起源があり、現在でも伝統的なスタイルの文法書によく見られるという。この用語を用いた場合の欠点として、屈折 (inflection) との区別がわかりにくいということが挙げられる。すなわち、屈折中の一部分、すなわち人称標示部分のみを transition と呼んでいるのか、屈折の代わりに transition という用語を用いているのか、ということである。他のアンデス先住民語の記述においてもこの用語が用いられることがある。

このほか、それほど一般的ではないが、包括人称 (inclusive) の代わりに4人称 (4th person) という用語が用いられることもある。ただしこの用語は、アイマラ語族の研究においてより一般的に用いられている。ケチュア語族においては除外形・包括形の区別は複数の場合のみに見られるのに対し、アイマラ語族では単数の場合にも見られる。そのような意味では、「4人称」という用語はアイマラ語族の記述においてより適当であろう。

4.5. アイマラ語族

4.5.1. 分布と系統分類

アイマラ (Aymaran) 語族はアイマラ語 (Aymara)、ハカル語 (Jaqaru)、カウキ語 (Kawki、または Cauqui) からなる。伝統的にはハケ (Jaqi) 語族という呼び方が一般的であったが、近年はアイマラ語族という呼び方も定着してきている。最大の言語であるアイマラ語は、ペルー・ボリビア国境にあるティティカカ湖をはさんでペルー側、ボリビア側両方に分布している。ボリビア側のほうが話者人口が多い。ティティカカ湖周辺の一部の地域でケチュア語族と分布が重なる。ハカル語とカウキ語はペルー中央部に分布し、周囲をケチュア語族の言語に取り囲まれている。いずれも話者人口は少なく、カウキ語は消滅の危機に瀕している。ハカル語・カウキ語域と、アイマラ語域のあいだ、すなわちペルー南部アンデス地域では、現在はケチュア諸語が行なわれている。正確な分布は不明だが、歴史書の記述や地名などからみて、この地域ではかつてはアイマラ語族の何らかの言語が話されていたはずである。またアイマラ語はケチュア語族に比べて方言差が小さいとされている。すなわち、現在の分布域にアイマラ語が定着した時期は、ケチュア語族と比べて、比較的新しいと考えられる。以上のことから見て、アイマラ語の本来の分布域は現在よりも北であったが、ケチュア語族におされて南下した可能性が高い。

4.5.2. 類型的特点

アイマラ語族の類型的特点はケチュア語族とよく似ていて、統合度の高い言語である。アイマラ語族のほうが形態音韻論が複雑であり、また動詞における人称標示がより体系的である。上述したように、アイマラ語族とケチュア語族の類型的類似性の大きな原因は言語接触によるアイマラ語族からケチュア語族への影響と考えられているが (Adelaar 2011 など)、語彙面では双方向の借用があったと考えられている。

4.5.3. 文法書

20世紀半ば以降、アイマラ語族の言語の研究は、長いあいだフロリダ大学の Hardman を中心として行なわれてきた。アイマラ語については、Hardman et al. (1988) や Hardman (2001) などの文法

書があるが、近年は Hardman 以外による研究も見られるようになった。たとえば Cerrón-Palomino (2000) がある。ただし Cerrón-Palomino の言語学的な関心は一貫してアンデスの歴史言語学であり、本書もそのような意図で書かれていると思われる。現在までに書かれた文法書でもっともわかりやすく詳細なものは Coler (2014) である。本書はペルー側のアイマラ語の記述である。

ハカル語については Hardman (2000) がある。カウキ語については管見の限り文法書は見当たらない。カウキ語はまだ話者が存在しているかどうかも分からないが、ハカル語はいまだ話者が存在すると考えられる。ハカル語の研究は非常に少ないため、さらなる研究が望まれる。

4.5.4. 記述上の特徴

アイマラ語族の言語の記述上の特徴は、おおむねケチュア語族の場合と共通している。すなわち、かつては形態素分析が十分でないものや、グロスが付されていないものがあった。以下は Hardman et al. (1988) による。

- (7) *jisk'a.cha.si.ña.sa.:k.i.ti* 'no debemos discriminarnos'
(Hardman et al. 1988: 293)

これは一語であり、「私たちは（互いに）差別するべきではない。」という訳があてられている。Hardman は形態素境界に - の代わりに . を用いるので、この語は *jisk'a-, -cha-, -si-, -ña-, -sa-, -i⁶-, -k-, -i-, -ti* の 9 つの形態素に分けられることが分かる。しかしグロスが付されていないので、個々の形態素の意味や働きはこの例だけではわからない。

形態素境界 - の代わりに . を用いる表記法は Hardman 独自のものであり、アイマラ語研究で一般化しているとはいえない。Cerrón-Palomino (2000) や Coler (2014) では - が用いられている。

アイマラ語族研究で用いられる独自の用語として、文接尾辞 (sentential suffix) や独立接尾辞 (independent suffix) というものがある。以下にハカル語の文接辞の例を挙げる (Hardman 2000: 95)。

- (8) *Marka.m.txi.* 'Is this your town?'

Hardman (2000: 95) によれば、*-txi* は疑問／否定のフォーカスを表す、という。これはケチュア語の *=chu* を想起させる。ケチュア語族と同様の問題、すなわち、屈折接尾辞の外側に現れる形態素を、「接辞」と分析してよいか、という問題がある可能性がある。

用語そのものの問題もある。上で述べたようにこの種の形態素はアイマラ語族の研究では一般に「文接尾辞」や「独立接尾辞」と呼ばれているが、「独立接尾辞」という用語は形容矛盾である。語幹に付いていて切り離せないから接辞なのであって、それを「独立」と形容するのはおかしい。接尾辞の中で比較的自立度が高いもの、という意味なのかもしれないが、まぎらわしい用語であることは確かである。

このような用語法は、ケチュア語族 (細川 1988b など)、チパヤ語 (Cerrón-Palomino 2006) にも見られるので、アンデス先住民語研究の伝統であるといってもいいかもしれないが、これを採用しない研究も少なくない。

⁶: は長母音を表す。

4.6. チパヤ語

チパヤ語 (Chipaya) はボリビア西部で話されている言語であり、後述するウチュマタク語とともに、ウル・チパヤ語族を成す。Cerrón-Palomino (2006) による記述がある。Cerrón-Palomino は主にケチュア語の研究を行ってきた研究者であるため、用語や記述のスタイルは彼のケチュア語研究に沿ったものである。

チパヤ語の語形成は膠着的で接尾辞型である。また、アイマラ語族やケチュア語族ほど体系的ではないが、動詞における人称標示が見られる。一方、clusivity の区別は見られない。

4.7. アラウコ語族

アラウコ語族 (Araucanian languages) の言語はチリ南部に分布しており、他のアンデスの言語とはやや地理的に離れている。すでに述べたように、「アンデス」に含めるべきではないかもしれないが、典型的に一定の共通性が見られることから、ここで取り上げることにした。代表的な言語はマプチェ語 (Mapuche, または Mapudungun) であり、記述の多くもマプチェ語のものである。近年のものに Smeets (2008) や Zúñiga (2000) がある。

マプチェ語と、ケチュア語族、アイマラ語族は、以下の共通する類型の特徴を示す。形態論が膠着的で接尾辞によること、動詞において主語と目的語両方の人称が標示されること、数が標示されること、時制・ムードが標示されること、動詞の名詞化が見られること、等である。またマプチェ語もケチュア語族やアイマラ語族同様、形態的にかなり複雑な言語である。Zúñiga (2000: 73) は、動詞の形態構造を示す際に “There is no consensus as to how many suffix slots one should postulate, nor is the relative order of the suffixes exactly as depicted in the table in every single instance” と述べている。ケチュア語族やアイマラ語族の研究と同様の問題があると思われる。

しかし clusivity の区別がない、名詞抱合がある、数に単数／双数／複数の区別がある、といった特徴はケチュア語族やアイマラ語族と異なる。また、すでに述べたようにアラウコ語族の研究は、他のアンデス先住民語とは異なる研究者集団によって行なわれており、記述のスタイルや用語にケチュア語・アイマラ語研究と大きな共通性は見いだせない。

4.8. カリヤワヤ語

カリヤワヤ語 (Callahuaya, または Kallahuaya) は、いわゆる混合言語 (mixed language) の一種である。文法構造はケチュア語に由来するが、語彙の多くが後述するプキーナ語に由来する可能性があると考えられる。このプキーナ語の語彙を保存しているという理由で、研究者に注目されてきた。断片的な記述だが、Oblitas Poblete (1968)、さらには先行研究のデータをまとめた Muysken (1997)、Muysken (2009) などの記述がある。

カリヤワヤ語を話す人々は、民間医療を行なう呪術師 (witch doctor) である。そしてカリヤワヤ語は呪術の際に用いられる言語である。母語として用いられたことがあるかどうかや、現在でも話されているかどうかはわからないという (Muysken 2009: 147)。

4.9. いくつかの死語

4.9.1. プキーナ語

プキーナ語 (Puquina) は死語となった言語で、歴史書にその名が見られるが、言語資料は非常に限られている。残された資料から、アマゾン流域に分布するアラワク語族に属すると考えられ

ている。系統分類から見れば、プキーナ語はアンデス先住民語ではなくアマゾン先住民語として扱われるべきかもしれないが、分布域などの理由から、アンデス地域の研究者によって扱われてきた。Adelaar and van de Kerke (2009)などに記述があるが、言語資料が限られているため、きわめて断片的な記述にとどまっている。

プキーナ語が注目されてきたのは、プキーナ語が話されていたと考えられる地域で、かつてティワナク文明が栄えていた、と考えられていることによる。すなわち、考古学・歴史的な観点から注目されてきたとあってよい。上述のカリャワヤ語についても、同様のことがいえる。セロン＝パロミーノ (2012, 他) は、インカ皇族 (の祖先) がプキーナ語を話していたという仮説を提示しているが、この仮説は現在のところ言語学者のあいだで多くの支持を集めている、とはいえない。

4.9.2. ウチュマタク語

ウチュマタク語 (Uchumataqu) はティティカカ湖周辺からポリビア側にかけての地域で話されていた言語である。ウル語 (Uru) と呼ばれ、チパヤ語とともにウル・チパヤ語族を成す。1950年頃に死語になったとされている (Hannß 2008: 1)。過去の資料をもとにした記述として Hannß (2008) がある。

ウチュマタク語とケチュア語族・アイマラ語族とでは以下の類型的共通性が見られる。動詞における人称 (主語・目的語)、時制、モダリティ、証拠性の標示。動詞を非定動詞化する接尾辞 (名詞化, その他) の存在, 等。ただし人称標示が付属語 (clitic) による点は異なる。地理的分布や、借用があることからみて、ウチュマタク語とアイマラ語族やケチュア語族とのあいだには接触があったと考えられる。

4.9.3. モチーカ語

モチーカ語 (Mochica) は、ペルー北部海岸に分布していた言語で、チムー文化の担い手の言語と考えられている。20世紀初頭まで話者が存在した。これまで述べてきたアンデス地域の言語とは分布域が異なる。Cerrón-Palomino (1995) や Hovdhaugen (2004) などの記述がある。語形成が膠着的で接尾辞型である点は他のアンデス先住民語と共通しているが、Hovdhaugen (2004) は類型的に他のアンデス先住民語とは異なると述べている。動詞における人称表示が見られず、clusivityの区別はない。また、名詞語幹に所有語幹と非所有語幹の区別がある、という。

ペルー北部海岸に分布していたその他の言語はいずれも死語となっており、また、目立った記述がほとんど残されていない。

5. まとめ

本稿では、南米先住民語の研究史や近年の概説書について簡単に見たあと、アンデス先住民語とその文法書について述べた。アンデス先住民語の記述研究は、20世紀半ば以降に盛んになった。かつては形態論に紙幅が割かれる傾向が強かったが、近年は包括的な文法書も見られるようになってきている。アンデス特有の記述のスタイルの伝統や、用語、といったものはあまりないが、いくつか特殊な用語が見られる。その一部は分析の問題とも関連している。

謝辞

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」（2016-2017年度）の成果の一部である。

略語一覧

ACC	対格	NEG.FOC	否定のフォーカス
DAT	与格	NEG.IMP	否定命令辞
ENCL	enclitic	NMLZ	名詞化接尾辞
INF	不定(詞)	PROG	進行相
IMP	命令	Q.FOC	疑問のフォーカス

参考文献

- Adelaar, Willem F. H. 1977. *Tarma Quechua: Grammar, Texts, Dictionary*. Lisse: Peter de Ridder Press.
- . 2011. “Trayectoria histórica de la familia lingüística quechua y sus relaciones con la familia lingüística aimara.” *Boletín de Arqueología PUCP* 14: 239-254, Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.
- . 2013. “Quechua I y Quechua II: En defensa de una distinción establecida.” *Revista Brasileira de Lingüística Antropológica* 5-1: 45-65.
- Adelaar, Willem F. H. with the collaboration of Pieter Muysken. 2004. *The Languages of the Andes*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Adelaar, Willem and Simon van de Kerke. 2009. “Puquina.” *Lenguas de Bolivia Tomo 1: Ámbito andino* (Mily Crevels and Pieter Muysken, eds.), 125-146, La Paz: Plural.
- Bravo, Domingo A. 1956. *El quichua santiagueño. Reducto idiomático argentino*. Tucumán: Universidad Nacional de Tucumán.
- Campbell, Lyle and Verónica Grondona, eds. 2012. *The Indigenous Languages of South America: A Comprehensive Guide*. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Cerrón-Palomino, Rodolfo. 1976. *Gramática quechua: Junín-Huanca*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- . 1987. *Lingüística quechua*. Cuzco: Centro de Estudios Rurales Andinos “Batrolomé de las Casas.”
- . 1995. *La lengua de Naimlap*. Lima: Fondo Editorial de Pontificia Universidad Católica del Perú.
- . 2000. *Lingüística aimara*. Lima: Centro de Estudios Regionales Andinos “Batrolomé de las Casas.”
- . 2006. *El chipaya o la lengua de los hombres del agua*. Lima: Fondo Editorial de Pontificia Universidad Católica del Perú.
- セロン=パロミーノ, ロドルフォ 2012 「インカの言語」(蝦名大助(訳) 島田泉・篠田謙一(編) 『インカ帝国—研究のフロンティア』, 51-71, 秦野: 東海大学出版会.
- Cole, Peter. 1985. *Imbabura Quechua*. London: Croom Helm.
- Coler, Matt. 2014. *A Grammar of Muylaq' Aymara: Aymara as Spoken in Southern Peru*. Leiden and Boston: Brill.
- Constenla Umaña, Adolfo. 1991. *Las lenguas del área intermedia: introducción a su estudio areal*. San José: La Universidad de Costa Rica.
- Coombs, David, Heidi Carlson de Coombs, and Robert Weber. 1976. *Gramática quechua: San Martín*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.

- Crevels, Mily and Pieter Muysken, eds. 2009. *Lenguas de Bolivia Tomo 1: Ámbito andino*. La Paz: Plural.
- . 2012. *Lenguas de Bolivia Tomo 2: Amazonía*. La Paz: Plural.
- Cusihuamán, Antonio. 1976. *Gramática quechua: Cuzco-Collao*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- Dixon, R. M. W. and Alexandra Aikhenvald. 1999. *The Amazonian Languages*. New York: Cambridge University Press.
- Ebina, Daisuke. 2011. “CUSCO Quechua.” *Grammatical Sketches from the Field* (Yasuhiro Yamakoshi, ed.), 1–39. Fuchu: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Gildea, Spike. 1998. *On Reconstructing Grammar: Comparative Cariban Morphosyntax*. New York: Oxford University Press.
- Gonzales Holguín, Diego. 1607 [1842]. *Gramática y arte nueva de la lengua general de todo el Perú llamada lengua qquichua o lengua del Inca*. Genova: Pagano.
- González de Pérez, María Stella and María Luisa Rodríguez de Montes, eds. 2000. *Lenguas indígenas de Colombia: una visión descriptiva*. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo.
- Hannß, Katja. 2008. *Uchumataqu: The Lost Language of the Urus of Bolivia. A Grammatical Description of the Language as Documented between 1894 and 1952*. Leiden: CNWS Publications.
- Hardman, M. J. 2000. *Jaqaru*. Munich: LINCOM Europa.
- . 2001. *Aymara*. Munich: LINCOM Europa.
- Hardman, M. J., Juana Vásquez and Juan de Dios Yapita Moya. 1988. *Aymara: compendio de estructura fonológica y gramatical*. La Paz: Instituto de Lengua y Cultura Aymara.
- Heggarty, Paul. 2005. “Enigmas en el origen de las lenguas andinas: nuevos hallazgos.” *Revista Andina* 40: 9–57.
- 細川弘明 1988a 「アルゼンチン＝ケチュア語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大事典第1巻』, 523–524, 東京: 三省堂.
- . 1988b 「ケチュア語族」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大事典第1巻』, 1589–1608, 東京: 三省堂.
- . 1989 「南米インディアン諸語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大事典第2巻』, 1494–1525, 東京: 三省堂.
- Hovdhaugen, Even. 2004. *Mochica*. Munich: LINCOM Europa.
- Klein, Harriet E. Manelis and Louisa R. Stark, eds. 1985. *South American Indian Languages: Retrospect and Prospect*. Austin: University of Texas Press.
- Lastra, Yolanda. 1968. *Cochabamba Quechua Syntax*. The Hague: Mouton.
- Levinsohn, Stephen H. 1976. *The Inga Language*. The Hague: Mouton.
- Muysken, Pieter. 1997. “Callahuaya.” *Contact Languages: A Wider Perspective* (Sara G. Thomason, ed.), 427–447, Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- . 2009. “Kallahuaya.” Crevels and Muysken, eds. 2009, 147–167.
- O’Connor, Loretta and Pieter Muysken, eds. 2014. *The Native Languages of South America: Origins, Development, Typology*. Cambridge University Press.
- Oblitas Poblete, Enrique. 1968. *El idioma secreto de los Incas*. Cochabamba: Los Amigos del Libro.
- Parker, Gary. 1976. *Gramática quechua: Ancash-Huailas*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- Payne, Doris L. 1990. *Amazonian Linguistics: Studies in Lowland South American Languages*. Austin: University of Texas Press.
- Quesada, Félix. 1976. *Gramática quechua: Cajamarca-Cañaris*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.
- Rodrigues, Aryon Dall’igna. 1986. *Línguas brasileiras: Para o conhecimento das línguas indígenas*. São Paulo: Edições Loyola.
- Santo Tomás, Domingo de. 1560. *Grammatica o arte de la lengua general de los indios de los reynos del Perú*. (Reprinted in 1995, Cuzco: Centro de Estudios Rurales Andinos “Batrolomé de las Casas”.)
- Shimelman, Aviva. 2017. *A Grammar of Yauyos Quechua*. Berlin: Language Science Press.
- Smeets, Ineke. 2008. *A Grammar of Mapuche*. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Soto Ruiz, Clodoaldo. 1976. *Gramática quechua: Ayacucho-Chanca*. Lima: Ministerio de Educación/Instituto de Estudios Peruanos.

- Weber, David John. 1989. *A Grammar of Huallaga (Huánuco) Quechua*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- . 1996. *Una gramática del quechua del Huallaga (Huánuco)*. Lima: Instituto Lingüístico de Verano (Summer Institute of Linguistics).
- Wroughton, John R. 1996. *Gramática y textos del quechua Shausha Huanca*. Yarinacocha: Instituto Lingüístico de Verano (Summer Institute of Linguistics).
- Zúñiga, Fernando. 2000. *Mapdungun*. Munich: LINCOM Europa.